

第十三話 強きものと弱きもの

皆様、今は少し古くなりましたが、戦争直後から数年間、巷に流行したいわゆる流行語の中に、ドライとウェットという言葉がありました。ドライな考え方とか、ドライ娘などという言葉が盛んに使われたものでした。そして、どちらかというと、ドライと反対なウェットという言葉が古い思想を代弁するものとして、一種の侮りをもった意味で用いられ、それに対してドライという言葉がなにか新鮮な新しい生き方を代弁するもののように考えられたものでした。

このドライとかウェットとかいう言葉の意味は、もちろん皆様ご存じの通りで、それぞれ、英語の、乾燥した、乾き切った、バサバサとしたという意味と、それに反対な湿った、ジメジメとしたという意味の言葉でありまして、それが、物事の考え方や生活態度に応用されて、ドライとは、すべて物事を金銭的なあるいは現世的な損得の概念で、数学的に割り切った、きわめて唯物論的な考え方や生活を意味し、反対にウェットとは、なんのもうけにもならない、一文の得にもならないとわかっていながら、義理や人情や、実在もしない理想論などに引かれて生きる、数学

的にはさっぱりと割り切れない生き方を指すことになったようです。

アメリカにこんな笑い話がありました。ある若い婦人が、自分の夫にだまされたと行って法廷に訴え出しました。原告側の婦人は言うのです。

「自分は主人と結婚したばかりですが、結婚するまで、主人は自分の年齢を七十五才だと言っていて、私もそうとばかり信じて結婚したのに、実は、主人は私を偽っていたのです。」

そこで判事が、

「それでは、ご主人は七十五才だと言っていたのに、ほんとうはもっと年寄りだったのですか？」

と尋ねますと、婦人は、

「いいえ、とんでもない。それならなにも文句はないのですが、実は、主人は六十五才だったのです。七十五才というから結婚したのですが、六十五才なら結婚するんではありませんでした。」と答えたというお話です。この小話の意味はおわかりになるでしょう。日本にも戦後、チョクチョクと、この種の勇敢なお嬢さんがあったようです。若いお嬢さんたち——と言っても、もちろん良家の子女ではないでしょうが、

「お嬢さんの理想の結婚相手は？」

と尋ねられ、平然として

「お金持ちのおじいちゃん！」

と答えたお嬢さんたちがあつたようです。おじいちゃんだから間もなく死ぬでしょう。死ねば遺産がこぼれ込む。さて、それから、おもしろおかしく人生を楽しむのだという、真に割り切った考え方、つまり非常にドライな考え方なのですね。

もちろん、これはドライという言葉をも一つドライに割り切った用い方であるかもしれない。ドライな考え方という言葉の中には、そのよい面、すなわち、もっと深い生活の知恵が含まれていることを私は否定しませんが、戦後の流行語としてのこの言葉の用い方にはやはり唯物論的な意味を含ませた場合が多かつたようです。

その反対に、ウェットというと、たとえばひとりの愛人を思い、その愛人とは結婚によって結ばれることができなかったにもかかわらず、そのひとりを、おのが生涯におけるただひとりの人と考えて、そのひとりの愛情の想い出におのが操を捧げて生きるといったような生き方、外目には、つまり唯物論的な損得の立場から見ると、真になんの足しにもならぬ愚かな生き方としか思えぬ、そういうふうな、物事の考え方や生き方を指しているのです。

ところで、先年、ヨーロッパを旅行中、私は一つの興味深い話を聞きました。どこでしたか町

の名は忘れましたが、何でも、ドイツとの国境近くにあるフランスの一寒村に、今度の大戦中に戦死した、フランスのゲリラ部隊十数名の墓があるのですが、その墓に混じって、ひとりの無名のドイツ兵の墓が一つ立っているのです。そしてすでに、戦争も終わって十数年経った今日も、なお、その無名ドイツ兵の墓の前には、だれが供えるのか手向けの花の絶えたことがないのとことです。

いったい、そのドイツ兵とは何者なのかと尋ねると、村の人々はひとみに涙を光らせながら、次のように話してくれることでした。

それは、第二次大戦も末期に近いころのことでした。戦争勃発と共に、電光石火のようなドイツ軍の進撃の前に、あえなくつぶれたフランスではありましたが、祖国再建の意気に燃えるフランスの青年たちの中には、最後までドイツに対するレジスタンスに生きた勇敢な人々がありまして、ここかしこに神出鬼没なゲリラ戦を展開しては、ナチの将兵を悩ましておりました。が、武運拙くと言いましうか、十数名のゲリラ部隊がついに敵の手に捕えられました。残虐なナチの部隊長は、なんの詮議もなく、直ちに全員に銃殺の刑を申し渡しました。ゲリラ部隊の隊員の数と同じだけのドイツ兵がずらりと並んでいっせいに銃を構え、自分の目の前のフランス兵にねらいを定めて「撃て！」という号令を待ちました。と、間一髪、ひとりのドイツ兵が、突然叫び声

っており、死をもって強制されたのですから、自分にはなんの責任もありませんし、戦争犯罪に問われることもなかったでしょう。どっちみち殺されるゲリラ隊員なのですし、撃てばせて自分の生命が助かるのですから、撃ってもよかったのではありませんね。

そうです。撃ってもよかったのです。けれど、皆様、撃ったなら、どうなったでしょう？ 確かにそのドイツ兵の生命は助かりました。けれど得をしたのは、そのドイツ兵ひとりの生命です。ナチの残虐の消えがたい思い出と共に、ひとりのドイツ兵の生命が長らえ得たのです。

しかし、そのドイツ兵は撃ちませんでした。のみならず、自分も殺されて行きました。ところでなにか得があったかとお尋ねになるなら、こう答えましょう。ひとりのドイツ兵の死はそれを目撃した人々に忘れ得ぬ思い出を残したのみならず、ナチの残虐行為の一つはこの思い出によって洗い浄められ、その話を伝え聞くほどの人々の心に、ほのぼのとした生きることの希望を与えました。ナチの残虐にもかかわらず、人間の持つ良識と善意とを全世界の人々の心に立証したのです。このような人がひとりでも人の世にいてくれたということで、私たちは人生に絶望しないうですむ。今は人々が猜疑と憎しみでいがみ合っていることも、私たちは人生に絶望しないでする可能性が残っている限り、いつの日にか再びほんとうの心からの平和がやって来ると信ずることができる、人間というものに信頼をおくことができる……これが、このドイツ兵の死がもた

をあげました。

「隊長！ 私の前のフランス人は重傷を受けて、完全に戦闘能力を失っています。こんな重傷兵を撃ち殺すことはできません！」

今まで、かつて反抗されたことのないナチの隊長は怒りに目もくらんだように、口から泡を吹きながら叫び返しました。

「撃て！ 撃たないなら、お前も、そいつと一緒に撃ち殺すぞ！」と。

けれど、そのドイツ兵は二度と銃を取り上げませんでした。ソツと銃を足下におくと、静かな足取りで、ゲリラ部隊の中に割って入り、重傷を負うて、うめいているフランス兵をかかえ起こすと、しっかりと抱き締めました。次の瞬間、轟然といっせいに銃が火を吐いて、そのドイツ兵とフランス兵とは折り重なるように倒れて息絶えて行ったというのです。

ところで皆様は、このドイツ兵を、どうお思いになりますか？ ドライな考え方からするならば、これほど、ばからしい死に方はありませんね。この男が死んで、だれが、どんな得をしたというのでしょうか？ だれも。そうです。ほんとうにだれも得をした人はありませんでした。その男が撃たなくとも、どうせだれかが撃ったでしょう。しかもあたら将来あるこのドイツ兵自身までも殺されるのです。その上、戦争中のできごとです。戦争中は隊長の命令が絶対的な力を持

らした贈物なのでした。どこの生まれか、名も知らぬ、年もわからぬこの無名の敵国の一兵士の墓の前に戦後十数年を経た今日、未だに手向けの花の絶えることのないという一つの事実こそ、彼の死の贈物に対する人類の感謝のあらわれでなくてはなりません。

皆様、残虐なナチは、その生みの親ヒットラー総統と共に滅びました。そして、ナチの軍靴に蹂躪され、アッという間にこの世から抹殺されてしまったはずのあのドイツ兵の思い出だけが、未だに人々の心の中に暖かく抱き締められているという事が、何を意味するか、おわかりでしょうか？

私たちはとすると、目に見える力、何かを生産する富の力、何かを破壊する武力、他人を屈服せしめる権力、そういう外見的な力だけを偉大なものとして尊重し、それだけが実在するもの、現実的なものと考えて、その他のものは、非現実的なもの、あってもなくてもよいものというふうに考えがちですね。そして、前者、すなわち力を征服者、勝利者とたたえ、後者を弱者、無力者、敗北者と考えがちですね。けれども、ほんとうに人間の世界を、人間の世界らしく、美しく作り上げて行くものは、この二つのうちの、果たしてどちらだと皆様はお考えになりますか？

古代のローマ大帝国は、さしに権力をほしきままにした大帝王たちと共に、歴史の流れの中

に滅び失せました。しかし、その崩壊の騒音の中で静かに生きた聖オーガスチンの懺悔録は、未だに、読む人の心に深い潤いをもたらしています。大詩人ラシーヌや劇作家モリエールたちは、当時の風習に従い、自分の作品を時の権威者に献呈しました。しかし献呈された権力者たちの名は、今、だれが覚えていられるでしょうか？ が、献呈した弱者は今でも生き続けています。

歴史の流れは無情です。大災害、戦争、地震、経済的危機などの中に、すべてのものを分解し破壊して行きます。けれど、それらの世俗的騒擾をよそに、音楽家は作曲を続け、詩人は歌い、学者は学び、そして、宗教は無数の聖者を生み続けます。彼らは弱者です。この世の権力者は彼らをただ一言でこの世から抹殺できるでしょう。けれど、生き残るものは権力者ではありません。この世を人の世として完成するもの、それは征服者ではなくて、弱者、私たちがともすると非現実的な存在と考えている小さな人々のうちに満ち溢れ、充足した魂のいのちなのであります。

皆様、古代ローマが滅んだように、バビロニアやカルタゴがその帝王たちと共に滅び失せたとくに、現代の二大強国、アメリカやソヴィエトも、いつか滅び失せましょう。ヒットラー、ムッソリーニ、スターリンの名も忘れられると同様に、現代の英雄たちの名もいつか忘却のかたに消え失せることでしょう。だが、それらとなんの関係もなく、人間の世界は、人間の世界らし

く、しみじみとしたものを内に宿しつつ着々と形造られて行くでしょう。いや、行かねばならないのです。そして、それを形造るもの、それは、小さく、だれの目にもとまらなくとも、内に輝きを放って、聖く真剣に生き抜く人間の魂のいのちなのであります。

人間は複雑なもの、そして人間の世界も、また複雑なものを含んでいるようですね。では、皆様また、来週のこの時間に。

第十四話 三百五十円のいのち

皆様、今まで両三度にわたってお話し申し上げてきたこと——人間の内面的な美しさ、芸術というものの、あるいはドライとウェットな生き方などについてお話し申し上げてきたことから、私は皆様がおのずから一つの結論をお引き出しになったのではないかと思います。あるいは結論とまでは行かなくとも、私が何を話そうと意図しているかということをおぼろげにでもお気づきになったのではないかと思います。それは、人間とはきわめて複雑なもの——やがて土に帰って行くこの動物的な肉體^{からだ}だけで、すなわち物質だけでできていると簡単に割り切ってしまう何ものかである——という一つの事実なのであります。

今世紀の初頭から、すばらしい勢いで発展して参りました科学の成功に目がくらんで、私たち近代人は、ともするとすべてを科学的に割り切り切りたい、つまりすべてを目で見、手で触れ得る世界に返したいと思うようになり、また目で見たり手で触れたりできる世界、つまり科学で立証された世界だけが、唯一の実在なのであり、それ以外の世界、科学の対象となり得ない世界は、非